

2025年3月30日 四旬節第4 池上「立ち上がって帰る」

本日の福音書は『放蕩息子のたとえ』として、とてもよく知られた物語です。聖書に馴染みの無い人でも、善きサマリア人のたとえと、この放浪息子のたとえは、名前だけでも聞き覚えがある方がおられます。

私も立派な親不孝者の放蕩息子でしたので、この物語は痛く身に染みて、早い内からくり返し読んでいました。そして気持ちが近いのは当然、自分勝手にわがままな弟の方でした。子どもの頃からずっと「どうしてお前はいつも、そわそわして落ちつきが無いの」そう叱られてばかりいました。確かに幼稚園の時から、じっとお部屋に座っていられずに、園庭を駆け回っていました。

幼稚園も先生も友だちも大好きでした。毎日大声で歌った「くがやまようちえんの歌」も、園長先生のお顔も、初恋の人である担任の山崎先生の顔も、はじめての親友櫛引君の顔も声も、みんな全部憶えています。けれどじっとしていられなかった。いつも飛び出して走り廻っていました。

それから60年経って、今も変わらず私には、落ちつきがありません。2008年に23年間続けたカレー屋を締めました。その年6年間働きながら通ったルーテル学院大学を卒業したからです。それから1年かけて準備をして、2009年に日本ルーテル神学校の3年に編入しました。

カレー屋には多くのお客が来てくださり、そこに集まる人たちの大切な場所になっていました。「それなのにどうして辞めるのか」多くの人たちからお叱りを受けました。けれどこれにははっきりとした理由がありました。ベネチアのフランチェスコ会修道院の中庭で、「よく来たね。もう何も心配しなくてもいいよ。」

という言葉が空から降ってくるように与えられたのです。涙があふれました。それからアッシジのフランチェスコのように、すべてを捨てイエスキリストに従う人生がはじまりました。

けれど店を止めるには、いろいろな準備が必要です。二年近くかけて友人と手作りした内装を、すべて壊して元どおりのコンクリートの躯体に戻さなければなりません。補習講義と毎週日曜日に国立から通う長岡での礼拝で忙しい私に代わって、連れ合いがこの監督を引き受けてくれました。様々な無理な願いを引き受けてくれた妻は、本当に放蕩息子の言葉に従ったあの父親のようです。

そして神学校3年に編入した後、7月からはじまる長岡教会での宣教研修にも、妻は同行してくれました。それがNRK神学教育委員会から私に与えられた、研修の必要条件でした。この冬は記録的な大雪で、あっという間に目の前に降りしきる雪の為、家の近くで右も左も分からない体験を何度もしました。妻の支えが無ければ、7ヶ月間の宣教研修を終えることは出来ませんでした。

人生にはまったく思いも寄らぬ事が起きます。いつでも思う通りには行かないのが私たちの暮らしです。この放蕩息子の譬えの中で、一番に自分勝手に生きているはずの弟が、実は一番自分の思った事とは違う事件に次々と出会います。1.親から貰った全財産を使い果たす。2.ひどい飢饉が起こって食べものに困る。3.他人の世話になるが、豚の世話をさせられる。4.だれも食べ物をくれない。けれどこの弟が一番驚いた、自分の思いと全く違う出来事は、『父親の愛を裏切って飛び出した自分を、父親はまだ愛して、自分を許して、以前と変わらないように受け入れてくれた』という事です。

弟はどれほど驚いた事でしょう。けれどももう一人、まったく変わらぬ父の愛に驚いた人がいます。それがずっと父親のそばにいて、父に仕えてきた兄です。この頃イスラエルでは一番上の男子が、家の財産を受け継ぐことが慣わしでした。それを親が活着ている中から弟が、自分の取り分を主張して受け取り、それを売り払って出て行く事はまったく常識外れです。それを使い果たして帰って来たのに、父親は一切を責めず受け入れました。兄にはどうしてもそれが理解出来ません。

彼は自分が長男として、父親の世話をしてきたという自負があります。ですから自分が絶対に正しいと信じて止みません。憤懣は弟だけにとどまらず、不甲斐ない弟を許そうとする父親にも向け

られます。「わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」

これは明かな嫉妬です。自分が正しいと信じ疑わない人は、誤った行いをした人だけでなく、その人を許そうとする人にも激しく抗議をします。誰かに激しく抗議する人の心には、「なぜあいつだけが！ずるい」という嫉妬の嵐が渦巻きます。この悪魔のささやきから自由になるのは、本当にむずかしい事です。そこで父親は言います。

『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

ここで驚くのは、父親が長男の言葉を否定しないことです。父親は長男の言い分をすべてよく聞いて、受け入れています。

「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる」

この言葉は、正当な父からの評価です。さらに

「わたしのものは全部お前のものだ」

という言葉によって、長男を心から安心させます。

その上で父親は長男に言います。

「だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。」

この言葉には父親の愛が満ち溢れています。哀れな息子は、本来自分が死んだ後に行われる、財産の分け前を先取りして、すべてを金に換えて出て行きました。

それを相手が死んだ者として、父親はその悲しみに耐えていました。生きていると思えば、どうしているかと心配になり、不安で心が安まりません。「それならいつそ死んだ者として、この息子の事を心配しないようにしましょう。」この父親はそう考えていました。それがいつの世にも変わらぬ親心です。

そんな父親のところに、生きて息子が帰って来ました。そして言うのです。

<お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。>

息子のこの言葉を聞き、悲しまない父親があるでしょうか。「この子がこれほど成長するのに、どれほどの苦しみや悲しみを乗り越えてきたのだろう。」

そして父親の心は、喜びと安心で満たされます。走りまわる孫たちの面倒を見るようになってから、多動児の子どもを持つ親の心が、そして亡くなった自分の両親の心が、最近やっと少しだけわかるようになりました。本当に親はいつもハラハラドキドキしてばかりいます。それでいて、子どもの邪魔にはならないように、いつも隠れて様子を見ずにはられません。

きっと神さまはこんな風に見守っていて下さいます。転んでもちゃんと立ち上がって、帰ってこれるか心配しながら、私たちを見守っていてくださいます。そして両手を拡げて私たちを迎え入れて下さいます。だから何も心配はいりません。立ち上がって、主の下に帰りましょう。